

## 《翻 訳》

『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注  
— 第四誠「汝の父母に孝行すべし」に関わる6つの告解 —Tradução integral portuguesa dos *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI*  
(Roma, 1632) da autoria de frei dominicano Diego Colhado: Confissões dos  
pecados dos crentes japoneses seiscentistas contra o quarto mandamento de  
Moisés

日 埜 博 司

2004年度リスボアにおける在外研修中、いろいろな方々の暖かい協力と指導とに浴し、ドミニコ会宣教師ディエゴ・コリヤードの著書『懺悔録』（1632年、ローマ刊）に収められた日本語テキスト全文へポルトガル語の訳注を施すという作業をひとまず終えることができた。この間の経緯については、『流通経済大学社会学部論叢』通巻第30号（2005年）所収の拙稿「コリヤード『懺悔録』葡語訳注雑感——在外研修余滴として」に記述した。前記葡語訳注はしかるべき準備期間を経、リスボアもしくはマカオで上梓されるであろう。

『流通経済大学論集』通巻第148号（2005年）所収の拙稿「『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第六誠「邪淫を犯すべからず」に関わる15の告解」に引き続き、本誌には、『コリヤード 懺悔録』の中からいわゆるモーセの十誡中第四誠「汝の父母に孝行すべし」に関する6つの告解を掲載する。

以下、解題の一部として、コリヤードがラテン文字で記す日本語表記法を簡単に整理するとともに、コリヤードの日本語テキストに特有のアクセント記号について簡単にふれておく。

『懺悔録』の著者であるディエゴ・コリヤードはスペイン出身のドミニコ会宣教師であるが、ラテン文字による日本語表記法は、当時のポルトガル系イエズス会宣教師が考案し『日葡辞書』など一般的なキリシタン版で用いられているものと基本的にはほぼ同じである。その主要ルールを具体例を引きつつ列挙する。

1 「オ」の長音はこれを特殊記号を用いて二種類に区別する。すなわち、「口を開いて発音」（ジョアン・ロドリゲス著『日本大文典』土井忠夫訳、三省堂、1955年。原著は1604年、長崎刊）し、「アウ」に由来する開音の「オー」[o:] を“ô”で、「唇を円く近寄せ口を少しく閉ぢて」（同上書）発音し、「オウ」または「オオ」に由来する合音の「オー」[o:] を“ô”で、それぞれ表記する。例、*dôgu* [道具] と *côron* [口論]、*fiôrô* [兵糧] と *fôcô* [奉公]等。ちなみに16世紀末の日本語でこの区別を含め一般的に美しく正しい発音のできる人のことを *Caigôno yoi fito* [開合の良い人] と称した。

2 「ヤ」「エ」（または「エ」）「ヰ」（または「イ」）「ヨ」「ユ」は、それぞれ“ia”, “ie”, “i”, “io”, “iu”と表記し、[ ja ] [ je ] [ ji ] [ jo ] [ ju ] と発音する。例、*iacusocu* [約束]、*ienpen* [縁辺]、*icari* [怒り]、*iôsugauari* [様子変はり]、*iurai* [由来] 等。ちなみに『日葡辞書』では“ya”, “ye”, “i”, “yo”, “yu”と表記されているが、双方に本質的な差異は認められないのでコリヤードの綴り字を尊重する。

3 「ワ」「ヰ」（または「オ」）「ウ」は、それぞれ“va” または “ua”, “vo” または “uo”, “v” と

表記し, [ wa ] [ wo ] [ wu ] と発音する。例, varambe [童], iuaibi [祝ひ日], votoco [男], tauosu [倒す], vqiiio [浮世] 等。

4 「シャ」「シェ」「シ」「ショ」「シュ」は, それぞれ “xa”, “xe”, “xi”, “xo”, “xu” と表記し, [ ʃa ] [ ʃe ] [ ʃi ] [ ʃo ] [ ʃu ] と発音する。例, xabet [差別], xecai [世界], xinjit [真実], xosa [所作], xucqe [出家] 等。

5 「ジャ」「ジェ」「ジ」「ジョ」「ジュ」は, それぞれ “ja”, “je”, “ji”, “jo”, “ju” と表記し, [ ʒa ] [ ʒe ] [ ʒi ] [ ʒo ] [ ʒu ] と発音する。例, jacufai [若輩], jennin [善人], jifi [慈悲], jōzu [上手], jūdo [十度] 等。

6 ハ行音は, それぞれ “fa”, “fe”, “fi”, “fo”, “fu” と表記し, [ Fa ] [ Fe ] [ Fi ] [ Fo ] [ Fu ] と発音する。例, fada [膚], fenji [返事], fima [隙], fotoqe [仏], fumi [文] 等。

7 「ジ」[ʒi] と「ヂ」[dʒi], および「ズ」[zu] と「ヅ」[dzu] の発音の違いを表わすため, それぞれ表記上の区別を施す。例, jinen [自然] と fagi [恥], zuibun [随分] と vonozzucara [自づから] 等。ジョアン・ロドリゲス『日本小文典』(日埜博司訳, 新人物往来社, 1993年。原著は1620年, マカオ刊)は従来一般的であった「ヅ」を zu とする表記法に反対し, 独自に dzu という綴りを考案した。訳者は, 生粋の高知県出身の年配者が「水」を「ミドウ」と発音するのをはつきりと聞いたことがある。「ヅ」を表記するためには, zu ではなく dzu こそが, 実際の発音をより忠実に反映する一段優れた表記法であると思うが, ここでは当然コリヤードの表記を尊重する。

8 「カ」「ケ」「キ」「コ」「ク」は, それぞれ “ca”, “qe”, “qi”, “co”, “cu” または “qu” と表記し, [ ka ] [ ke ] [ ki ] [ ko ] [ ku ] と発音する。例, caracuri [からくり], qeracu [快樂], qinjo [近所], cotoba [言葉], cuchi [口], somuqu [背く] 等。なお “cu” と “qu” はまったく同音ではあるが, 前者は名詞に, 後者は動詞の語尾にそれぞれ用いるという『日葡辞書』などイエズス会版で採用されたルールを踏襲している。

9 「ガ」「ゲ」「ギ」「ゴ」「グ」は, それぞれ “ga”, “gue”, “gui”, “go”, “gu” と表記し, [ ga ] [ ge ] [ gi ] [ go ] [ gu ] と発音する。例, gatten [合点], guecai [下界], dangui [談義], gotai [五体], miguruxij [見苦しい] 等。ロドリゲス『日本小文典』は「ゲ」と「ギ」の表記に関して, これがポルトガル語——さらにはスペイン語——を母語としない者によって「グエ」「グイ」と発音されるのを防ぐため, それぞれ “ghe”, “ghi” と——イタリア語風に——綴るべきであると主張する。訳者はこれをロドリゲスの優れた見識だと思うが, ここでもコリヤードの表記を尊重する。

10 「ツ」については入声形の “ṭ” と, 開音節化形の “t̄u” に分ける。例, xetxeṭ [節々], t̄utome [勤め]等。翻刻において前者は片仮名で, 後者は平仮名でそれぞれ表記する(ルビも同様)。

11 「ニャ」「ニョ」はそれぞれ “nha”, “nho” と表記し, [ nja ] [ njo ] と発音する。例, nhacudō [若道], nhōbō [女房]等。

ところで『コリヤード 懺悔録』のラテン文字による日本語テキストには, それを用いることにはいかなる意味があるのか理解に苦しむアセント・アグードやアセント・グラージェ, そして鼻音記号ティルが多数振られている。けだし前二者は強弱のアクセントを, 後者は鼻母音もしくは鼻濁音であることを示そうとするものなのであろう。『コリヤード 羅西日辞典』影印本に序文を寄せた土井忠生は, この辞書には, イエズス会版には見えない鼻濁音やアクセントがそれぞれ表記されていることに注目し, そこに「イエズス会の出版物を殊更排して, 強いて独自のものを表出しようとした意欲」を認める<sup>1</sup>。大塚光信も「コリヤードの版本には, 三書『日本文典』『懺悔録』『羅西日辞書』の三書——引用者注)に共通して,

<sup>1</sup> 『コリヤード 羅西日辞典』(Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm) 土井忠生序文, 大塚光信解題・索引, 臨川書店, 1966年, ii ページ。

母音字のうゑにtilde〔ポルトガル語ではtil—引用者注〕を附した形が見えるが、これは鼻母音をあらわそうとしたものであろう」と述べる<sup>2</sup>。

しかし日本語には由来、高低のアクセントしか存在しないはずだし<sup>3</sup>、脚注に引用したジョアン・ロドリゲス『日本大文典』（長崎、1603-04年）の記事を参照しても、前二者は問題外として無視してよさそうだし<sup>4</sup>。少なくともコリヤードの振ったアクセント記号を忠実に翻刻に反映させ、しかもそれにしかるべき校訂を加えようとするなら、もろもろの難題がたちまち湧き起こって途方もない混乱が起こり、收拾がつかなくなることは必至である。さらに母音字の上に振られた鼻音記号のティルに関していうと、16世紀末の日本語に「一種半分の鼻音」が存在したことは、ロドリゲス『日本大文典』が明らかにしているけれど<sup>5</sup>、イエズス会版にそのような発音が表記されることは通常ない。しかも彼は、この「一種半分の鼻音」をNまたは明白な鼻音に変えてはならないことを指摘している。

もし、これらの“アクセント”記号なり“鼻音”記号なりに日本語史料としての『懺悔録』を読むに欠かせぬ編者コリヤードの意図が込められていて、しかもその正当性に対する一般的承認が存在するのであれば、コリヤードの用いる符号はこれをどこまでも尊重せねばなるまい。しかし大塚光信が『懺悔

<sup>2</sup> 大塚光信著『抄物きりしたん資料私注』清文堂、1996年、230ページ。

<sup>3</sup> 国語学会編『国語学大辞典』金田一春彦執筆「アクセント」の項参照、東京堂出版、1980年。

<sup>4</sup> ジョアン・ロドリゲスは1604-08年に長崎で刊行した文法書の第二巻に「日本語の談話の上にあるアクセントに就いて」という項目を立て、「発音上にはその音調、又は抑揚、又はアクセントがあり、自然の発音法がある。それによって音節や語を極めて明瞭に区別し、他の国語と同様に同音異義語を互に区別するのである」と述べた後、その抑揚もしくはアクセントには国々によって差異があるものの、「全国語の中で正しくて自然なのは、Goquinai [五畿内] の五ヶ国のと、Yechijen [越前]、Vacasa [若狭]、Tamba [丹波]、Vömi [近江]、Farima [播磨] のとである」と記述する（『ロドリゲス 日本大文典』土井忠生訳注、三省堂、1955年、622ページ）。続いてロドリゲスは、「談話の上に存するアクセントの種類について」という項目を立て、「日本語の発音において、長音節でも短音節でも、三種のアクセントを区別する」ことに言及し、「即ち、直アクセント又は平アクセント、上昇する鋭アクセント、下降し又は低く発音する重アクセントがそれである」と述べて、発音法に関する記述に限り→、↑、↓という符号を用いてこれらを表わそうとしている（同上書、623-625ページ）。この記述は強弱ではなく高低のアクセントもしくは抑揚に言及したものにほかならない。しかしロドリゲスは、「短音節及び長音節の全般に関する附則」で、日本語のアクセント全般について「拉丁語その他の国語に於けるもの程には明瞭でない。寧ろいくらか控目であつて認めにくいものである。また、各音節には固有で自然なアクセントがあるけれども、その前後につづく別の言の音節によって、別のアクセントに変わることが多いのである。即ち、重か平であったものが鋭にかはり、或いは又逆な変化もする。それはまた、動詞の語形が時と法によって延びる場合にも起ることである」と総括して（同上書、628ページ）、日本語におけるアクセントもしくは抑揚には、ロマンス諸語において存在するような絶対的規範は存在しないという正確な考察を行なっている。

<sup>5</sup> ジョアン・ロドリゲスは『日本大文典』第二巻に「D, Dz, G の前の母音に関する第三則」(Regra Terceira da Vogal, ante, D, Dz, G) という項目を立て、「D, Dz, G の前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音かソソネエテかを伴ってあるかのやうに発音される。即ち、鼻の中で作られて幾分か鼻音の性質を持つてある発音なのである」と記す一方（同上書、637ページ）、別の箇所では「それを N 又は明白な鼻音に変へてはならない。例へば、Tôga [科]、Vareraga [われらが]、Nagasaqui [長崎] の代りに Tonga [とんが]、Vareranga [われらんが]、Nangasaqui [なんがさき] といふなど」と注意することも忘れていない（同上書、620ページ）。

録』の和文翻字に際し、当該の符号には盲従しない方針を表明していることから推定しうるように<sup>6</sup>、コリヤードの用いる符号の正当性に関する一般的承認は存在しないように思われる。終生イエズス会に対する強い対抗意識を有し、日本語関係著述の編纂にまでその片鱗を窺わせて「強いて独自のもの」を主張しようとしたコリヤードの和文テキストを校訂・整定するにあたり、最もオーソドックスであろうと考えられるイエズス会版の日本語表記法を導入することに少々ためらいを覚えぬわけではないけれど、上述の事情に鑑み、これらの符号をそのまま無批判に翻刻することは避ける。

そこで、私どもの翻刻では、少なくともイエズス会版の一般的綴字法から見れば明らかに無意味な記号を削除し、コリヤード自身の記憶違いにもとづく日本語綴りの混乱や、開合の区別の誤りなどを適宜訂正することにした。

参考までに、『サルヴァトル・ムンヂ』に見える第四誡「汝の父母に孝行すべし」に関する問い掛けの条々を掲載し、『懺悔録』に見える告解のひとつひとつの照応ないしは非照応ぶりを検討するための便宜とする（適宜句読点を補い、キリシタン用語がそのままポルトガル語で用いられている場合はこれをカタカタに直す。読みやすさを考え、適宜ひらかなをルビの形で漢字に開き原文には見えない送りかなを送る等の措置を施す）。私どもが通常考える「親孝行」の概念からは遠く隔たる内容を含む問い掛けが多いようであるが、これに関する詳しい考察は別の機会に譲る。

#### 第四のまだめんと

一、父母に対する孝行、いかにありや。又其事たらず、なんぎなる時、力をそへたりやいなや。

二、夫は妻を無理にきびしく折檻し、女は、夫より科にあらざる事をいひ付くる時、随はざりしや否や。

三、子を持ちたる者は、キリシタンにあたる肝要の題目を教へ、科をする事あらばいさめ、中にも、若道、其外の色にふける事あらば折檻を加へ、男子・女子ともに色このみの科に落ちざるやうにせいをい入るべき事なれば、此等の儀にゆるかせありや否やを糺すべし。

四、ゼンチョのひくはんを持ちたる人、別して家内にめしつかふ者ならば、キリシタンになるべき様にいけんを加ゆべき事専要なれば、此儀に油断ありや否やを申すべし。然りといへども、おさへてキリシタンになさんとする事、曾あるべからず。同じく、其下人キリシタンならば、御おきての旨を保つ様に心懸けをなしたりや否やと糺すべし。

コンヒサン申す人、知行をもつ人を進退する者ならば、此上に又左の条々をしあんすべし。

五、領内の者どもに対して非道を行ひたる事ありや。

六、我が進退する者どもの内に公事沙汰など出来したる時、非を糺さず理に落着したる事有りや。

七、領内の者どもに力に及ばぬくはやくをかけ、無理におんざいに過ぎて米銭を出させたる事ありや。

八、モルタル科になる事をいひつけたる事ありや。

九、害すべき程の科なくして我が進退する者を害させたるか、或は其科真（実）なりや否やを知らずして成敗したる事ありや。

十、人を成敗する時、叶ひながらコンヒサンを申させざりし事ありや。又其者ゼンチョなりしを、叶ひながら、殺さざるいぜん（以前）にキリシタンになさざりし事ありや。

十一、科ある者を成敗する時、科なきさいしけん（其子眷屬）ぞく一門の者どもを害したる事ありや。

<sup>6</sup> 大塚光信著『コリヤードさんげろく私注』臨川書店、1985年、3ページ。

十二、物の奉行などをいひつけたる者、あらはれて無理を行ふと知りながらいさむる事なく、知らぬていにてめしつかふ事ありや。

十三、ねんぐをおさむる時、百姓を無理にせめいらで、なさけなくあたりたるや。

コンヒサンを申す人、物の役・奉行・代官などをする人ならば、又此条々を糾すべし。

十四、さいばんする主人の物を自他の為にかずめ取りたる事ありや。

十五、百姓など、地頭におさめずしてかなはぬねんぐ、又は何れの人にてもあれ、わが主人にまいなはずして叶はぬ事あるを、或はわいろにふけり、或はしたしみなるによつてひいきをし、或は油断によつて其利を主人に失はせたりや。同じく、一人のまいなふべき事を其あたらざる別人にかけたる事ありや。

十六、公事役をさせ、物を出さする時、主人の下知よりも猶多くさせ、其余りをばわたくしの徳となしたりや。

十七、百姓のねんぐを請けとり、又公事役などをさするに、けんぼうをこえ、猶きびしくしたる事ありや。其を如何といふに、此等の事は達してつとめさすべき事けんぼうたりといへども、情けなくせむべき事にはあらず。

十八、百姓の前よりは大きなる升にて請け取り、主人へは小さき升にて治めたるや。其外主人の下知をもて飯米をおろし、或は他にうけおひたる米・五穀を渡す時、悉く渡さず、我が為にか主人の為にか、ひかへ置きたる事ありや。

#### 訂正

『流通経済大学論集』通巻第148号(2005年)所収の拙稿「『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第六誠「邪淫を犯すべからず」に関わる15の告解」113ページ1行目を謹んで下記のとおり訂正する。

(誤) /p.36/ Rocuban no von voqite nitçuite [六番の御掟について].

(正) /p.36/ Rocuban no go voqite nitçuite [六番の御掟について].

/p.30/Xiban no go voqite<sup>7</sup> ni tçuite [四番の御掟について]

/p.31/Circa quartum præceptum.

Acerca do quarto mandamento.

<sup>7</sup> «Daixi, nangi no bum□ ni cõcõ subexi» [第四、汝の父母に孝行すべし] (NIPPON NO IESVS no Companhia no Superior yori Christan ni sõtõ no cotouari uo tagaino mondõ no gotoqu xidai uo vacachi tamõ DOCTRINA, p.50); «Ho quarto mandamento he: “Hõrra teu padre e madre”» (O Cathecismo Pequeno de D. Diogo Ortiz, p.186); «Respeita o teu pai e a tua mãe, para que vivas muitos anos na terra, que o Senhor, teu Deus, te vai dar» (Biblia Sagrada. Boa Nova); «Honrai o teu pai e a tua mãe, para que se prolonguem os teus dias sobre a terra que o SENHOR, teu Deus, te dá» (Biblia Sagrada. Para o Terceiro Milénio da Encarnação).

30

Xibàn no go vòqite ni tcùite.

**V**Acacuxí ga nhóbö mo, cõdomo mo voia mo mòchi maraxita mono de vògiaru sò de gozaréba xùromè tovoiofo nacachìgote i marafuru. sono xifai va soré ga igi ga varüte cõ domo ca nhóbö ni ca arui va iqen arui va, xeccan o cùvaiuru tòqi are ie coràicrareide nàqi faqèbi curuvàre marafuru nìotte de gozaru. màtanhóbo fufu no chìguiri ni fènqi xeraruru tòqi mo sadamète nuxí ga fáfa no ijtçuqè de aró to furió xite soré demo iccõ xicari marasùru. mata miga fatachi no musucò vòba jèn ácu nuxi no iádo ni tomè to xeraruru ni tçuite, vaga iitçucuru xigòto uò fimaga nõte xènu tòqi va, faru tote va qicoienu còto gia to nõxite tete ni xitågavánu, buxitçugena cotò mo xicari, màta amari nāgaraiuru ano tòxi iorí ga faio xine taxi! to fai fai xinte iorí zonji maraxita. goròcũdo mo fore to caracõte, giqini accò vo fáqi, cāguédemo ni fando foxiri sono coto sanzani fata, tòri naxi maraxite, tçuini fore càra futa tçuqi mitçuqi no áida ni sòre to cotóbamo caváxi maraxenande gozatta. màta megia mòno to xichi fáchido murini fará vo tatète, ichinido va tçura vo vchi, ma ichido va bó de ta-taqi, futátabi mo qètavoxi áxide vòxi funde quainin no mòno naréba, co vo voròsaxe maraxitá. Sono uie màta rõtai no uòia xù ni taixite burei ni fore no, qi ni cacàta fènji vo mòdoxi maraxita, mata iqitè gozaru còto mi ni mutçucáxú zonjite, tçuideni mo sono zaifò uo iüz-zùru tamenì, xinò to nozomi maraxitá ga ichido bacàri xinjit càra de gozatta ni, nocori ua cuchi bacari de gozatta.

Tòqi doqi mo jácu fai mòno to iorí óte, xucurò, finniq, fusòcu naru mòno uo meri fifò xi, sòreni uiamai, cu uà-ieuòzuru jifi no cauári ni táda foxiri azaqeri bacari caqe maraxita.

Mata miga xaqió to dai jinai còto ni tçuite ni fando caracõte fucòxi no áida ni sòre to xicari, nanica qízzucaí, qēga, uāzauáj ni auare cáxi! to nozomi maraxitá ga nido de gozatta: ichido ua xincòn càra nani nari tomò cocorozá

32

rozaxī ga ātte , maichīdo ua sanomi fucō gozaranānda :  
tāda zanzato touōri maraxita .

Mata iotabi aru padre fama no guiōgui uo miga tçūqi ai  
no mōnō domo foxiraruru uo qiite, sōre uo tōgame-  
nu nominarāzu, qēccu dōxin xite uaremo sōno go mem-  
bocu ni ataru cōto uōba ai foxiri maraxita . tocācu sōno  
iōriai no ninu ua mina sōre uo iō xiraretarēdomo  
Deus no go miōdai no acūguiō mo tōri atçucōte zōtan-  
no daimocu to naitāga uarui to zonji nagarā ita ita coto  
va miga ai amari giā .

Sōno foca, suqimā mo nōte miga fufu no uie ni rinqi na co-  
coro uo uocoite, aite mādē tāre to mo jafū xite, ninin-  
nagarā nicui arçu to uomōi; narāba docūde nari tōmo  
ūchi corosō to zonji maraxita cotō ga nīdo gozatta .

Mata nhōbō cōdōmo no iaxina nitçūite faicacu cocōrō-  
gāqe mo xicaxica gozarāide, sōno xindai, guiō gui, Chri-  
stian no ioi catāgui nāndo, mādē canavaide ua no cō-  
to narēdomo; ima mādē zuibun itaxi maraxēide miga-  
tōga de gozaru .

### Goban no mandamiento nitçuite :

**S** Orēgaxi, iocoxima no mīchi uomi xiranu uo sanai mōno  
ni tēzzucara no inracu uo catari xi io uo mādē mo uoxi-  
ie susumete, sōno acu uo uoca faxe maraxita .

Mata iāgaru mōno ni uarui iqen uo cuaiete mortal tōga  
uo xeraruru motōzzūqi ni nari maraxitē gozaru .

Sōno fōca, mata: miga xiru fito fitōri ni uarui cōto uo tçu-  
tōme ni iqu cōto nari canavaide uare zonji nagara tōmo  
mo itaxi, sōre ni cōre ocu mo soie mxaraita . core na itçu  
rabi de gozatta .

Mata: uatacuxīga nhōbō uo motta musico ga aru, sono uo-  
nna miga iōme to fai fai cōron xite icōn uo fucūmi, xi-  
ne cāxi, ūchi jini auarē gana! minicui to zōnjite, nan-  
tomo uarēga meni cacararenu iōni itasōzuru ni ua to uo-  
mōi maraxita cōto ua rotabi fōdo de gozatta .

Sōno uie; qiriōna uotōco to qenqua xite, achi cāra mi uo  
sāxi

PRIMEIRA CONFISSÃO ACERCA DO QUARTO MANDAMENTO

Vatacuxi<sup>8</sup> ga nhôbô<sup>9</sup> mo co<sup>10</sup> domo<sup>11</sup> mo voia mo mochi maraxita mono de vogiaru. Sô de gozareba, xûtome<sup>12</sup> to voioso nacachigôte<sup>13</sup> i marasuru. Sono xisai va sore ga igi<sup>14</sup> ga varüte codomo ca nhôbô ni ca, arui va iqen arui va xeccan vo<sup>15</sup> cuvaiuru toqi, are<sup>16</sup> ie coraie<sup>17</sup> rareide, naqi saqebi<sup>18</sup> curuvare<sup>19</sup> marasuru niotte de

<sup>8</sup> «Vacacuxi» *in textu*. Correção conforme a «Errata sic Corrige» na página 66, onde se vê outra vez a palavra errada «varacuxi».

<sup>9</sup> Nho [女]. Vonna [女]. *Molher* (*Vocabulario*, f.181v). Nhôbô [女房]. *Idem* (*Vocabulario*, f.181v).

<sup>10</sup> Co [子]. *Filho*. ¶ Couo mōqeru [子を儲ける]. *Auer filho*. ¶ Couo nagasu [子を流す]. *Botar a criança que não esta ainda bem coalhada no ventre*. ¶ Couo daqu [子を抱く]. *Trazer o menino no collo* (*Vocabulario*, f.52).

<sup>11</sup> Ainda que não se registre no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* o verbete «Codomo», esta palavra – comuníssima ainda hoje – aparece duas vezes nas declarações de outros verbetes: «Fitofara [一腹]. *Modos de contar ventres*. *Vt*, Fitofarano codomo [一腹の子供]. *Filhos de hum ventre, i, de hũa mãy*» (f.349v); «Vocqua [負課]. *Diuida que hũ tem por pagar*. ¶ Vocquano catani codomoga torareta [負課のかたに子供が取られた]. *Tomarão lhe os filhos pella diuida*» (f.276v). Frei Colhado explica a palavra em questão num verbete do seu *Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm*, escrevendo o seguinte: «*Liberi, orum. hijos. Codomo* [子供]» (p.272).

<sup>12</sup> Xûtome [姑]. *Sogra* (*Vocabulario*, f.315). Existe ainda hoje no Japão uma tendência geral para que as mulheres que só têm filhas únicas, desejem que estas se preocupem e continuem a ocupar-se das suas mães após o casamento. Tendo em conta a sobredita tendência geral, tornar-se-á mais fácil compreender esta confissão, nomeadamente no que diz respeito às relações entre o confessado e a sogra.

<sup>13</sup> Nacachigai [仲違ひ], Nacachigô [仲違ふ], Nacachigôta [仲違うた]. *Estar desaiundo, ou quebrado com alguém* (*Vocabulario*, f.365v). O verbo «Nacachigô» é composto por um substantivo «Naca» e um verbo «Chigô». Vejam-se os seguintes dois verbetes no *Vocabulario*: Naca [中]. *Dentro, meo, entre, &c.* ¶ *Item, Amizade*. ¶ Nacauo chigô [中を違ふ]. *Quebrar a amizade*. ¶ Nacauo nauosu [中を直す]. *Fazer as amizades* (f.173); Chigai [違ひ], Chigô [違ふ]. Chigôta [違うた]. *Discrepar. ou ser diferente*. *Vt*, Chigô tocoroua nacatta [違ふところは無かった]. *Tog. Não auia diferença*. ¶ Guioini chigô [御意に違ふ]. *Discrepar do mandado, ou parecer de seu senhor* (*Vocabulario*, f.47v). Cf. Chigai [違ひ]. *Diferença*. *Vt*, Nifonto anatano cunino vôqina chigaiuo gofunbet are [日本と彼方の国の大きな違ひを御分別あれ]. *Entendei a grande diferença que ha entre Iapao, & aquelles reinos de là* (*Vocabulario*, f.47v). Chigai [違ひ]. *O discrepar*. ¶ Nacachigaide gozaru [中違ひでござる]. *Estar quebrado, ou diferente na amizade com outro* (*Vocabulario*, f.47v).

<sup>14</sup> Igi [意地]. *Condição*. *Vt*, Iginô yoi [意地の良い], I, Iginô varui fito [意地の悪い人]. *Homem de boa condição, ou ruim* (*Vocabulario*, f.173).

<sup>15</sup> «xeccan o» *in textu*. Nao se sabe se se deveria corrigir para «xeccanno» de acordo com a descrição acima citada do padre João Rodriguez Tçuzzu na sua *Arte da Lingoa de Iapam* (f.177v).

<sup>16</sup> Are [あれ]. *Aquella, ou aquillo*. ¶ Coreua areno de gozaru [これはあれのでござる]. *Isto he daquella* (*Vocabulario*, f.12).

<sup>17</sup> Coraye [堪へ], Corayuru [堪ゆる], Corayeta [堪へた]. *Sofrer* (*Vocabulario*, f.58v).

<sup>18</sup> Saqebi [叫び], Saqebu [叫ぶ], Saqêôda [叫うた]. *Gritar, bradar, ou prãtear* (*Vocabulario*, f.219).



gozaru. Mata nhôbô fûfu<sup>20</sup> no chigui<sup>21</sup> ni fenqi<sup>22</sup> xeraruru toqi mo, sadamete nuxi<sup>23</sup> ga fafa no iitçuqe<sup>24</sup> de arô to suiriô<sup>25</sup> xite, sore demo iccô<sup>26</sup> xicari marasuru. Mata miga fatachi<sup>27</sup> no musuco voba jenacu nuxi no iado ni tomeô<sup>28</sup> to xeraruru nitçuite, vaga iitçucuru<sup>29</sup> xigoto uo fima<sup>30</sup> ga nôte xenu toqiva, sarutote va<sup>31</sup> qicoienu coto gia to mōxite, tete<sup>32</sup> ni xitagavanu, buxitçuqena<sup>33</sup> coto mo xicari, mata amari<sup>34</sup> nagaraiuru ano toxiiori<sup>35</sup> ga, faiô xine caxi<sup>36</sup>! to saisai xinte<sup>37</sup> iori zonji

<sup>19</sup> Curui [狂ひ], Curù [狂ふ], Curûta [狂うた]. *Brincar, ou folgar*. ¶ Monono curù [物に狂ふ]. *Endoudecer, ou fazer desatinos*. ¶ Cuniga curù [国が狂ふ]. *Perturbarse, ou reuoluerse o reino (Vocabulario, f.67)*.

<sup>20</sup> Fûfu [夫婦]. Votto, me [夫, 妻]. *Marido & Molher (Vocabulario, f.106v)*.

<sup>21</sup> Chigui<sup>21</sup> [契り]. *Liança, amizade, &c.* ¶ *Item, Copula com esta palaura Comuru* [込むる]. *Vt, Chigui<sup>21</sup> comuru* [契りを込むる]. *Ter copula carnal (Vocabulario, f.47v)*.

<sup>22</sup> Fenqi [偏気]. *Contradizer a algũa cousa a que hum tem asco, ou auersão, por obras ou palauras*. *Vt, Varui gentioxù Christãono voxiyeuo fenqi suru* [悪いゼンチョ衆キリシタンの教へを偏気する]. *Os gentios maos desdanhão da doutrina dos christãos, & mostranlhe pouca vontade, &c (Vocabulario, f.86)*.

<sup>23</sup> Nuxi [ぬし]. *Vos, ou tu, falando com gente baixa (Vocabulario, f.188v)*.

<sup>24</sup> Forma substantivada do vebro «lytçuquru».

<sup>25</sup> Suiriô [推量]. *Voxifacaru* [推し量る]. *Conjeiturar*. ¶ *Suiriô suru* [推量する]. *Conjeiturar (Vocabulario, f.230v)*.

<sup>26</sup> Iccô [一向]. *Fitamuqi* [ひたむき]. *Em todo o caso*. *Vt, Iccôni tanomi zonzuru* [一向に頼み存ずる]. *Peçovos em todo o caso, ou por todas as vias*. ¶ *Iccô naranu* [一向ならぬ]. *Por nenhum caso pode ser (Vocabulario, f.127v)*.

<sup>27</sup> Fatachi [廿歳]. *Idade de 20. annos (Vocabulario, f.82)*.

<sup>28</sup> Tome [留め・止め], Tomuru [留むる・止むる], Tometa [留めた・止めた]. *Deter a alguem, ou algũa cousa (Vocabulario, f.230v)*.

<sup>29</sup> Iytçuqe [言ひ付け], Iytçuquru [言ひ付くる], Iytçuqeta [言ひ付けた]. *Mandar, ou dizer a alguem mandandolhe (Vocabulario, f.138v)*.

<sup>30</sup> Fima [隙]. *Palaura de se espantar, ou encarecer algũa cousa*. *Vt, Saritoteua vôqina murigia* [さりとは大きな無理ぢゃ]. *Por certo que he hũa grande sem razão (Vocabulario, f.219v)*.

<sup>31</sup> Saritoteua [さりとは]. *Palaura de se espantar, ou encarecer algũa cousa*. *Vt, Saritoteua vôqina murigia* [さりとは大きな無理ぢゃ]. *Por certo que he hũa grande sem razão (Vocabulario, f.219v)*.

<sup>32</sup> Tete [父]. I, Chichi [父]. *Pay (Vocabulario, f.256)*.

<sup>33</sup> Buxitçuqena [不躰な]. *Mal acostumado, ou que sabe pouco de policia, ceremonias, & cõprimentos*. *Buxitçuqeni* [不躰に]. *Buxitçuqesa* [不躰さ] (*Vocabulario, f.28v*). Cf. *Buxitçuqe* [不躰]. *Mao ensino, descortezia*. ¶ *Item, O não saber bem as ceremonias pertencentes às cortesias, & seruiço politico*. ¶ *Buxitçuqeuo suru* [不躰をする]. *Fazer mao ensino, ou falta nas cortesias (Vocabulario, ff.28-28v)*.

<sup>34</sup> Amari [余り]. *Sobejo*. ¶ *Item, Adu. Muito sobejamente. Vsase no principio da oração, & no fim conforme a diuersas significações*. *Vt, Amarini samuy* [余りに寒い]. *Faz muito frio*. ¶ *Amarini ficui* [余りに低い]. *He muito baixo destatura*. ¶ *Item, Passante, ou mais*. *Vt, Sannen amari* [三年余り]. *Passante de tres annos, ou mais de tres annos*. ¶ *Yorocobino amari* [喜びの余り]. *Polla muita alegria, ou contentamento, &c.* ¶ *Mini amari catajiqenai*

maraxita. Gorocudo mo sore to caracôte<sup>38</sup>, giqini accô vo faqi<sup>39</sup>, cague<sup>40</sup> demo ni sando soxiri, sono coto sanzan ni sata tori naxi maraxite, tçuini sore cara futatçuqi mitçuqi no aida ni sore to cotoba mo cavaxi<sup>41</sup> maraxenande gozatta. Mata me<sup>42</sup> gia mono to xichi fachido murini<sup>43</sup> fara vo tatete, ichi nido va tçura<sup>44</sup> vo vchi, ma ichido va bö<sup>45</sup> de tataqi, futatabi mo qetavoxi<sup>46</sup> axi de voxi funde, quainin<sup>47</sup> no mono nareba, co vo vorosaxe<sup>48</sup> maraxita. Sono uie mata, rötai<sup>49</sup> no uoia xu ni taixite,

---

[身に余り忝い]. *Agradeço muito em extremo (Vocabulario, f.8).*

<sup>35</sup> Toxiyori [年寄り]. *Velho (Vocabulario, f.265v)*. Cf. Toxiyuqi [年行き]. *Idem (Vocabulario, f.265v)*. Toxiuoi [年老ひ]. *Velho (Vocabulario, f.265v)*. Toxiyori [年寄り], Toxiyori [年寄る], Toxiyotta [年寄った]. *Enuelhecer (Vocabulario, f.265v)*.

<sup>36</sup> Caxi [かし]. *Particula de optatiuo (Vocabulario, f.338v)*.

<sup>37</sup> Xintei [心底]. Cocorono soco [心の底]. *Intimo do coração (Vocabulario, f.304)*.

<sup>38</sup> Caracai [からかひ], Caracô [からかふ], Caracôta [からかうた]. *Porfiar, ou contender (Vocabulario, f.39v)*. Cf. Caracai [からかひ]. *Contenda, ou porfia (Vocabulario, f.39v)*.

<sup>39</sup> Faqi [吐き], Faqu [吐く], Faita [吐いた]. *Vomitar*. ¶ Chiuo facu [血を吐く]. *Lançar sangue polla boca*. ¶ Tçuuo facu [唾を吐く]. *Cuspir*. ¶ Goncuuo facu [言句を吐く], l, Cuuo facu [句を吐く]. *Dizer sentenças*. Quôguenuo facu [広言を吐く]. *Dizer fanfarriças, ou roncás (Vocabulario, f.80)*.

<sup>40</sup> Cague [影・蔭・陰・翳]. *Sombra*. ¶ *Item, Per met. Emparo, ou proteção*. ¶ Micague [御影], l, Goyei [御影]. *Imagem de Sancto, &c*. ¶ *Item, Cague [影・蔭・陰・翳]*. *Lugar escuro, ou secreto*. ¶ Monouo caguede môsu [物を陰で申す]. *Falar manso, ou consigo sô algũa cousa*. ¶ Caguegotouo yû [陰事を言ふ]. *Murmurar dalguem em ausencia (Vocabulario, f.32)*.

<sup>41</sup> Cauaxi [交し], Cauasu [交す], Cauaita [交いた]. *Vt, Cotobauo cauasu [言葉を交す]*. *Praticar entre si*. ¶ Yacusocuuo môxi cauasu [約束を申し交す]. *Prometer, ou fazer concertos entre si (Vocabulario, f.44)*.

<sup>42</sup> Me [女]. *Femea ou molher casada (Vocabulario, f.154v)*.

<sup>43</sup> Murini [無理に]. *Adu. Sem rezam*. ¶ *Item, Violenta, & forçosamente (Vocabulario, f.365)*.

<sup>44</sup> Tçura [頬・面]. *Cara, ou focinho. Item, Parte, ou banda*. *Vt, Figaxino tçura [東の面], l, Nixino tçura [西の面]*. *Parte do Leste, ou Oeste*. ¶ Soretçurano mono [それ面の物]. *Cousa dessa laya, teor, ou aparencia (Vocabulario, f.249v)*.

<sup>45</sup> Bö [棒]. *Bastão, ou bordão, ou vara com que se castiga*. ¶ Böuo suru [棒をする]. *Esgrimir com o bastão, ou manealo*. ¶ Böuo tçucô [棒を使ふ]. *Idem*. ¶ Böuo tçuqu [棒を衝く]. *Vzar de bordão*. ¶ Böno te [棒の手]. *Modo, ou arte de esgrimir com bastão (Vocabulario, f.23v)*.

<sup>46</sup> Trata-se do verbo composto de dois verbos «Qe», isto é, raiz do verbo «Qeru» [蹴る] e «Tauosu» [倒す].

<sup>47</sup> Quainin [懷妊]. *O estar prenhe*. *Vt, ¶ Quaininxita nhonin [懷妊した女人]*. *Mulher que esta prenhe*. ¶ Quainin de gozaru [懷妊でござる]. *Estar prenhe (Vocabulario, f.202v)*.

<sup>48</sup> Voroxi [下ろし], Vorosu [下ろす], Voroita [下ろいた]. *Abaixar, ou por em baixo algũa cousa*. *Vt, Niuo vorosu [荷を下ろす]*. *Descarregar, ou desembarcar fato*. ¶ Caxirauo vorosu [頭を下ろす]. *Rapar a cabeça a primeira vez*. ¶ Couo vorosu [子を墮ろす]. *Botar a molher a criança fora de tempo matandoa, &c*. ¶ Fouo vorosu [帆を下ろす]. *Amainar a vela*. ¶ Vuouo vorosu [魚を下ろす]. *Escalar o peixe de maneira que fiquem a hũa parte as espinhas, & sustancia a outra pera se concertar como Namasu, ou picado, &c*. ¶ luouo sanmai voroxini suru

burei ni sore no qi<sup>50</sup> ni cacatta fenji vo modoxi maraxita. Mata iqite gozaru coto mi ni mutçucaxũ<sup>51</sup> zonjite, tçuide<sup>52</sup> ni<sup>53</sup> mo sono zaifô<sup>54</sup> uo iuzzuru<sup>55</sup> tameni, xinô<sup>56</sup> to nozomi<sup>57</sup> maraxita ga, ichido bacari xinjit cara de gozatta ni, nocori ua cuchi bacari de gozatta.

わたくし によぼう こども おや も もの  
私 が女房も子供も親も持ちまらした者でおぢやる。さうでござれば、  
しうとめ なかちが ゐ しさい いち わる こども  
姑 とおよそ仲違うて居まらする。その子細は、それが意地が悪うて、子供  
によぼう いけん せっかん くは とき くら  
か女房にか、あるいは異見、あるいは折檻を加ゆる時、あれえ堪えられいで、

[魚を三枚下ろしにする]. *Escalar, ou cortar o peixe desta maneira tirandolhe dambas as partes a carne, & deixando a hũa parte as espinhas.* ¶ Daicon, wasabi nadouo vorosu [大根, 山葵などを下ろす]. *Ralar rabão, & outra fruíta que requeima, &c.* ¶ Qedamonono xisocuuu vorosu [獣の四足を下ろす]. *Fazerem quartos o animal.* ¶ Icaríuu vorosu [錨を下ろす]. *Ancorar.* ¶ Yamayori cajega fuqi vorosu [山より風が吹き下ろす]. *Ventar de algum monte, ou serra.* ¶ Yamavoroxino caje [山下ろしの風]. *Vento que vem de cima dos môtes (Vocabulario, f.283v).*

<sup>49</sup> Rôtai [老体]. i, Toxi yori [年寄り]. *Velho (Vocabulario, f.213).*

<sup>50</sup> Qi [気]. *Coração, espiritos vitaes, ou vigor do coração.* ¶ Qiga sanzuru [気が散ずる], l, qiuo sanzuru [気を散ずる]. *Desabafar o coração.* ¶ Qiga tçucaruru [気が疲るる]. *Estar muito cansado, & abafado do coração.* ¶ Qiga tçumaru [気が詰まる]. *Idem.* ¶ Qiga tçuqu [気が付く]. *Tornar m si o que esmoreceo.* ¶ Qiga tçuquru [気が尽くる]. *Estar muito debilitado, & exhausto das forças interiores.* ¶ Qini ataru [気に当たる]. *Dar no coração.* ¶ Qini cacaru [気に懸かる]. *Fazer escrupulo, ou tocar no coração.* ¶ Fitono qiuo nadamuru [人の気を宥むる]. *Consolar a alguém.* ¶ Qiuo yauaraguru [気を和らぐる]. *Abrandar o coração.* ¶ Qiuo nomu [気を呑む]. *Afligirse muito, ou estar atribulado.* ¶ Qiuo vxinô [気を失ふ]. *Esmorecer.* ¶ *Item, Perder o animo.* ¶ Qiuo vru [気を得る]. *Tomar alento (Vocabulario, f.194).*

<sup>51</sup> Mutçucaxij [難しい]. *Cousa enfadonha, trabalhosa, ou de embaraço, &c.* Mutçucaxisa [難しさ]. Mutçucaxũ [難しう] (*Vocabulario, f.171v*).

<sup>52</sup> Tçuide [ついで]. *Ocasão, ou vez. Vt, Tçuideuo motte mairô [ついでを以て参らう]. Irei auendo oportunidade, & ocasião (Vocabulario, f.246v).*

<sup>53</sup> Tçuideni [序に]. *Adu. Idem.* ¶ Teno tçuideni, coreuo xite cudasarei [手の序にこれをして下されい]. *Ia que estais cõ a mão na massa, peçouos que façais isto (Vocabulario, f.246v).*

<sup>54</sup> Zaifô [財宝]. Tacara tacara [宝々]. *Riquezas (Vocabulario, f.327v).*

<sup>55</sup> Yuzzuri [譲り], Yuzzuru [譲る], Yuzzutta [譲った]. *Deixar, ou dar por herança (Vocabulario, f.327v).* Segundo Ôtsuka Mitsunobu, este verbo se emprega anormalmente no sentido de “receber (as riquezas dos meus pais) por herança” (*Koryādo Sangeroku Shichū, op.cit., p.35, nota 6*).

<sup>56</sup> «xinô» in textu.

<sup>57</sup> Nozomi [望み・臨み], Nozomu [望む・臨む], Nozôda [望うだ・臨うだ]. *Desejar, ou querer.* ¶ Toqini nozomu [時に臨む]. *Chegar-se a hora.* ¶ Saigoni nozomu [最後に臨む]. *Estar pera morrer.* ¶ Xengiôni nozomu [戦場に臨む]. *Chegar-se o tempo da batalha (Vocabulario, f.187).*

泣き叫び狂はれまらするによってでござる。また、女房夫婦の契りに偏氣せらるる時も、定めて主が母の言ひ付けであらうと推量して、それでも一向叱りまらする。また身が廿才の息子をば善悪主の宿に止めうとせらるるについて、我が言ひ付くる為事を隙が無うてせぬ時は、さるとては聞こえぬことぢやと申して、父に随はぬ、不躰なことも叱り、またあまり存ゆるあの年寄りが早う死ねかし！ と、細々心底より存じまらした。五・六度もそれとからかうて、直に悪口を吐き、陰でも二・三度謗り、そのこと散々に沙汰とりなしまらして、終にそれから二月・三月の間にそれと言葉も交しまらせなござった。また、妻ぢや者と七・八度無理に腹を立てて、一・二度は頬を打ち、ま一度は棒で叩き、二度も蹴倒し、足で押し踏んで、懐妊の者なれば、子を墮ろさせまらした。その上また、老体の親衆に対して、無礼にその氣に懸かった返事を戻しまらした。また生きてござること身に難しう存じて、ついでにもその財宝を譲る為に、死なうと望みまらしたが、一度ばかり真実からでござったに、残りは口ばかりでござった。

私、女房も子供も親も持つ身でございますが、姑との仲がまったくしっくりゆきませぬ。その子細でございますが、姑の意地が悪く、子供にであれ女房にであれ、その意見なり訓戒なりを伝えるとき、姑は我慢を抑えることができず、泣き叫び狂ったように暴れまわるのでございます。女房と夫、つまり私どもの契りの堅さを憎々しく思うときも、これはきつとお前の母がお前たちに夫婦円満を装うよう強制しているのであろう、と邪推しまして、とうてい怒りを収めませぬ。また、姑は、私のはたちの息子をば是非とも自分の家に引き留めようとするのがございます。私より言いつけた仕事を息子が暇なくてできぬときなど、姑は、さては由なき、許しがたきことじゃ、と申しまして、父親に随わぬ、不躰な子よ、と叱りつけます。ですから、私としても、いつまでもくたばらぬ、あの年寄りめ、早う死んでしまえ！ と、心底思うことが再々ございました。五～六度もこれと争い、面と向かって悪口を吐き、陰に回って二～三度謗り、ともかく姑のことはさんざんに言いましたあげく、二月か三月の間、姑と言葉を交わすこともございませんでした。また、妻女に対して七～八度ばかり理不尽にも腹を立て、一～二度はその頬を打ち、さらに一度は棒で叩き、二度にわたって蹴倒し、足で踏みつけて、その頃妻女は懐妊

の身でございましたが、子を墮ろさせてしまいました。そのうえまた無礼にも、老齡の親たちが不安になり、心配するような、ひどい口答えを致しました。私にとって両親が生きていることそれ自体を面倒に存じ、ついにはその財産・財宝を相続できるよう、両親が死ねばよいと願いました。一度そういうことを本気で思いましたけれども、他は口ばかりでございました。

*Ego habeo vxorem, filios, & parentes: cum ergo hoc ita sit quasi semper cum socru mea in inimicitia perseuero, ratio est: quia eum ipsa sit malæ inclinationis, quando ego vel cum vxore, aut cum filijs irascor, aut illos iuste castigo, illa non valens hoc sustinere plorat & vociferatur & videtur insanire: & propter hoc, & etiam quãdo vxor renuit debitum coniugale persolvere suspicans, illam hoc facere ex suæ matris persuasione valde contra illam socrum irascor, filium etiam meum viginti annorum violenter vult etiam socrus in domo sua detinere, & quando non potest ijs quæ ego illi præcipio attendere, & ex hoc illa non facit, dicens hoc esse intolerabile & inauditum & cum inobedienti & male educato filio irascor, & cõtra illam veterrimam anum tot annos viuentem quod statim moriatur sæpe sæpius ex corde desideravi. quinquies etiam cum illa contendens præsentialiter contumelias & verba iniuriosa in illam conieci, in absentia autem bis vel ter de illa murmuravi, & de suis rebus pessime sum loqutus, & exinde in duorum vel trium mensium spatio neque verbum cum illa contexui. cũ vxore etiam mea septies vel octies sine causa iratus, semel & iterum eius faciem cecidi, semel vero ligno, bis verò pedibus deiiciens & culcans, cum esset grauida fui in causa quod fœtus aboriretur. cum parentibus etiam (qui sunt iam senes) male me gessi, illis offensiua respõsa reddendo, fastidio, affectus etiam eorũ longa vita, & obiter vt eorum bona, & diuitias hereditarem, desideravi semel ex corde quod morentur. aliquoties verò ore tenus solum hoc pronuntiaui.*

Vivo com a mulher, meus filhos e consequentemente, a sogra, com a qual não me dou muito bem por ser de ruim natureza. Quando aconselha os meus filhos ou a minha esposa, em simultâneo os repreende, e não podendo refrear as suas emoções, chora, grita e quase enlouquece, fazendo mil desatinos. Além disso, as nossas boas relações conjugais causam-lhe aversão, tem ciúmes, ficando ainda mais agastada e furiosa, e, conjeturando infundadamente, afirma que a minha mãe nos obriga a fingir. Anda mais: a minha sogra, de vez em quando, tenta reter em sua casa o meu filho de vinte anos. Quando ele não consegue realizar o serviço que lhe mandei fazer, devido à falta de tempo, ela repreende-o, dizendo-lhe que o seu descuido é realmente imperdoável e que é malcriado e desobediente para com o seu pai, pelo que esta situação me levou a praguejar frequentemente contra ela, mesmo do fundo do coração: «Diabos levem aquela maldita velha, a qual não tem maneira de esticar o pernil! Vive demasiado! Oxalá que morra o mais depressa possível!» Discuti com ela cinco ou seis vezes, ofendendo-a directamente com palavras insultuosas e caluniei-a por duas ou três vezes às escondidas, praguejando fortemente contra ela, e por fim estive sem lhe falar por dois ou três meses. Mais, agastei-me sem razão nenhuma sete ou oito vezes com a minha mulher, esbofeteei-a uma ou duas vezes, e certa vez até lhe bati com uma vara, derrubei-a a pontapé e espezinhei-a. Em consequência disso, abortou, pois estava grávida. Fiz ainda uma réplica desumana do ocorrido aos meus velhos pais, réplica essa que os entristeceu e inquietou<sup>58</sup>. Por fim até me fartei deles e o facto de ainda

<sup>58</sup> «¶ Quebrãtã este mãdamento os filhos que põee mãos irosas em os padres ou lhe dizem palavras injuriosas e

estarem vivos fez-me desejar que morressem de forma a poder herdar-lhes os bens. Uma vez pensei nisso seriamente e nas outras só da boca para fora, sem verdadeira intenção.

SEGUNDA CONFISSÃO ACERCA DO QUARTO MANDAMENTO

Toqidoqi<sup>59</sup> mo jacufai<sup>60</sup> mono to iori öte<sup>61</sup>, xucurö<sup>62</sup>, finnin<sup>63</sup>, fusocu<sup>64</sup> naru mono uo meri<sup>65</sup> fifö<sup>66</sup> xi, sore ni uiamai, cuuaieüözuru jifi no cauari ni tada soxiri azaqeri<sup>67</sup> bacari caqe maraxita.

ときどき じゃくはいもの よ あ しゆくらう ひんにん ふそく もの めり ひほう  
時々も若輩者と寄り合うて、 宿老・貧人・不足なる者を罵詈・誹謗し、そ  
れに 敬ひ、 加へおうずる慈悲の替はりに、 ただ誇り 嘲りばかり掛けまらし

---

de doesto, ou os escarneçem, ou descubrem seus erros, como Cham filho de Noe, ou dizem mal aos vivos ou aos mortos, ou nom cunprem suas derradeiras vontades. Ou lhes nam obedecem em as cousas licitas e honestas. Ou lhes nõ catam reverencia em palavra, obra e cerimonia. Ou lhes falã duramente provocando a yra, nõ os suportãdo. Ou lhes nom proveem em suas necessidades següdo sua possibilidade» (*O Catecismo Pequeno de D. Diogo Ortiz*, pp.189-190).

<sup>59</sup> Toqidoqi [時々]. *Adu. De quando em quando, ou de tempo em tempo* (*Vocabulario*, f.261v).

<sup>60</sup> Iacufai [若輩]. Vacaqi tomogara [若き輩]. *Mancebo, ou de pouca idade*. ¶ *Item, Serue pera se humilhar mostrandose de pouco saber, & idade posto que seja de muita*. ¶ Iacufaina cotouo yü [若輩な事を言ふ]. *Dizer cousas de homem de pouca idade, ou pouco saber* (*Vocabulario*, f.140).

<sup>61</sup> Yori ai [寄り合ひ], Yori ö [寄り合ふ], Yori öta [寄り合うた]. *Ajuntarse muitos*. ¶ *Item, Casarse com alguem*. (*Vocabulario*, f.324).

<sup>62</sup> Xucurö [宿老]]. *Velho ancião* (*Vocabulario*, f.313v).

<sup>63</sup> Finnin [貧人]. i. Finin [貧人]. *Pobre* (*Vocabulario*, f.348). Cf. Finin [貧人]. Madoxij fito [貧しい人]. *Homem pobre* (*Vocabulario*, f.91). Finja [貧者]. *Idem* (*Vocabulario*, f.91).

<sup>64</sup> Confirmam-se os seguintes verbetes: «Fusocuna [不足な]. *Cousa falta, ou imperfeita*» (*Vocabulario*, f.111v); «*Defectuosus, a, um, vel deficiens, tis. Cosa falta adonde se echa menos*. Fusocuna [不足な]» (*Dictionarivm sive Thesavri Lingvae Iaponicae Compendivm*, p.32). Não se vê no *Vocabulario* a expressão «Fusocu naru mono» no sentido de “aleijado(s)” ou “pessoa(s) de deficiência física”. Sigo a interpretação que Ötsuka Mitsunobu faz no seu livro *Koryādo Zangeroku* [『コリヤード 懺悔録』], Iwanami Bunko [岩波文庫], 1986, p.53, nota 2.

<sup>65</sup> Meri [罵詈]. Nonoxiri [罵り], Nonoxiru [罵る]. *Repreensão aspera*. ¶ *Fitono meri fifö suru coto nacare* [人の罵詈誹謗する事勿れ]. *Não queiraes repretender, & dizer mal dos outros* (*Vocabulario*, f.157).

<sup>66</sup> Fifö [誹謗]. Soxiri [誇り], Soxiru [誇る]. *Praguejar, ou murmurar*. ¶ *Fifö xöbô* [誹謗正法]. *Dizer mal da boa ley* (*Vocabulario*, f.89v). «Fifö» *in textu*.

<sup>67</sup> Azaqeri [嘲り]. *Escarneo, ou zombaria*. Azaqeriuo fuxegu [嘲りを防ぐ]. *Fazer com que não seja escarnecido* (*Vocabulario*, f.17v). Cf. Azaqeri [嘲り], Azaqeru [嘲る], Azaqetta [嘲った]. *Escarneçer ou zombar* (*Vocabulario*, f.17v).

た。

ときどき若輩者と寄り合ひまして、年寄り、貧乏人、身体に障害のある者へ罵詈雑言を浴びせかけ、敬い慈悲を施すべきが筋であるにもかかわらず、謗ったり嘲ったりばかり致しました。

*Aliquando etiã iuuenibus associatus murmurauit de senibus, pauperibus, & de ijs qui aliquem defectum habent, & loco reuerentiã & misericordiã quam erga illos deberem ostendere; illos illusi & irrisi, & de illis murmurauit & contemptui habui.*

De vez em quando, ajuntando-me com mancebos sem educação, injuriei e disse muito mal dos dos anciões, dos pobres e dos aleijados, praguejando contra eles. Em vez de respeitá-los e tratá-los com a devida caridade e misericórdia, trocei e escarnei deles.

### TERCEIRA CONFISSÃO ACERCA DO QUARTO MANDAMENTO

Mata miga xaqiõ<sup>68</sup> to daijinaí<sup>69</sup> coto nitçuite, ni sando caracõte, sucoxi no aida ni sore to xicari, nanica qizzucaí<sup>70</sup>, qega<sup>71</sup>, uazauai<sup>72</sup> ni auare caxi! to nozomi maraxita ga nido de gozatta: ichido ua xincon cara nani nari tomo coco/p.32/rozaxi<sup>73</sup> ga atte, maichido ua sanomi fucõ gozarananda: tada zanzato<sup>74</sup> touori maraxita.

また、身が舎兄と大事な事について、二・三度からかうて、少しの間あひだにそれと叱り、何かしか気遣ひなに・怪我きづか・災けがひわざわに遭あはれかし! と望のぞみまらした

<sup>68</sup> Xaqiõ [舎兄]. l, Conocami [このかみ], l, Ani [兄]. *Irmão mais velho (Vocabulario, f.292v).*

<sup>69</sup> Daiji [大事]. Vôqina coto [大きな事]. *Grande cousa, ou de importancia. ¶ Item, Cousa de perigo. ¶ Daijimo nai [大事もない]. Não importa (Vocabulario, f.69v).*

<sup>70</sup> Qizzucaí [気遣い]. *Desgosto, pena, ou cuidados. ¶ Qizzucaiuo suru [気遣いをする]. Ter cuidados, ou tomar pena. ¶ Fitoni qizzucaiuo caquru [人に気遣いを懸くる]. Dar pena, & cuidados a alguém (Vocabulario, f.202v).*

<sup>71</sup> Qega [怪我]. *Erro, ou desastre. ¶ Qegano cõmiõ de gozaru [怪我の功名でござる]. He façanha, ou feito do desastre: vsase nas cousas que acertão de sair bem, & melhoradas por algum caso. ¶ Qegauo suru [怪我をする]. l, Qegauo caqu [怪我をかく]. *Acõtecer desastre, ou cousa que redundã em dano, vergonha, &c (Vocabulario, f.189v).**

<sup>72</sup> Vazauai [災ひ]. *Males, & trabalhos (Vocabulario, f.269).*

<sup>73</sup> Cocorozaxi [志]. *Boa vontade. ¶ Cocorozaxiuo tçüzuru [志を通ずる]. Ter o mesmo animo, & võtade, ou comunicar se no mesmo proposito, & vontade (Vocabulario, f.53v). Cf. Cocorozaxi [志し], Cocorozasu [志す], Cocorozaita [志いた]. Ter intenção, ou proposito. ¶ Igreja ye cocorozaita mairu [エケレジャへ志いて参る]. Ir à igreja direito, ou dirigido. ¶ Tequiou cocorozaita vtçu [敵を志いて討つ]. Matar o inimigo indo com este proposito, & tenção (Vocabulario, f.53v).*

<sup>74</sup> Zanzato [ざんざと]. *Adu. De pasajem. Vt, Zanzato touoru [ざんざと通る]. i, Passar de pressa. ¶ Zanzato cubaru [ざんざと配る]. Repartir facilmente. i. sem dificuldade nem dô do que daa (Vocabulario, f.328v).*

が、二度でござった。一度は心根より何なりとも志が有って、ま一度はさのみ深くござらなんだ。ただざんざと通りまらした。

また兄を相手につまらぬことで二、三度ばかり争いを致しまして、しばらくの間これと罵り合い、兄の身に何か心配事・損害・災いが降りかかればよいと望みました。そういうことが二度ございました。そのうち一度は心底よりそう願いましたが、もう一度はそこまで深い悪意を秘めたわけではなく、怒りはすぐに心中を通過してしまいました。

*Cum meo etiam maiori fratre circa rem nullius momenti bis vel ter etiam contendi, & per breue spatium fui iratus cum illo: bisque desideravi quòd illi aliquid infortunij accideret. semel desideravi ex corde quod aliquid mali (quidquid illud esset) /p.33/ illi eueniret, semel vero non ita; sed leuiter tantum ira transiuit.*

Mais: zanguiei-me por duas ou três vezes com o meu irmão mais velho sobre coisas de pouca importância. Agastámo-nos por algum tempo e desejei até, por duas vezes, que lhe sucedessem desgostos, desastres, males ou problemas. Uma vez desejei-o do fundo do coração, mas na outra sem tanta malícia. Por fim, a ira passou-me e o meu coração tranquilizou-se.

#### QUARTA CONFISSÃO ACERCA DO QUARTO MANDAMENTO

Mata iotabi aru padre sama no guiōgui uo miga tçui<sup>75</sup> no mono domo soxiraruru uo qiite, sore uo togamenu<sup>76</sup> nominarazu, qeccu<sup>77</sup> dôxin<sup>78</sup> xite, uaremo sono go membocu<sup>79</sup> ni ataru coto uoba ai soxiri maraxita. Tocacu sono ioriai<sup>80</sup> no ninju ua mina sore uo iô xirareta redomo Deus no go miōdai<sup>81</sup> no acuguiō<sup>82</sup> mo tori atçucōte, zōtan<sup>83</sup> no daimocu to naita ga, uarui to zonji nagara itaita coto va miga aiamari gia.

<sup>75</sup> Tçui<sup>75</sup> [付き合い]. *Commercio, & trato de varias partes, ou gentes. Vt, Tçuiaino tocoro [付き合いの所]. Lugar onde ha este commercio como escala, &c (Vocabulario, f.249).*

<sup>76</sup> Togame [咎め], Togamuru [咎むる], Togameta [咎めた]. *Perguntar estranhando como quem reprende. ¶ Item, Notar. & prender (Vocabulario, f.259).*

<sup>77</sup> Qeccu [結句]. *Antes, ou pollo contrario (Vocabulario, f.189).*

<sup>78</sup> Dôxin [同心]. Vonaji cocoro [同じ心]. *Consentimento. ¶ Dôxin suru [同心する]. Consentir (Vocabulario, f.74).*

<sup>79</sup> Membocu [面目]. *Honra. ¶ Membocu mini amaru [面目身に余る]. Ter grandissimas honras. ¶ Membocuuo fodocosu [面目を施す]. Adquirir honra, & louuor. ¶ Membocuuo vxinō [面目を失ふ]. Perder a honra (Vocabulario, f.156).*

<sup>80</sup> Yoriai [寄り合ひ]. *Ajuntamento, ou companhia de gente. ¶ Item, Parentes (Vocabulario, f.324).*

<sup>81</sup> Miōdai [名代]. *O que està em lugar de outro, ou lugar tenente. ¶ Miōdaini tatçu [名代に立つ]. Estar, ou ser posto em lugar de outro. ¶ Miōdaiuo tatçuru [名代を立つる]. Dar, ou por alguém em seu lugar (Vocabulario, f.161).*

<sup>82</sup> Acuguiō [悪行]. Axij voconai [悪い行なひ]. *Ruins obras (Vocabulario, f.3).*

<sup>83</sup> Zōtan [雑談]. Monogatari [物語]. *Pratica de diuersas cousas. ¶ Zōtan suru [雑談する]. Praticar diuersas*



また四度、あるパードレ様の行儀を身が附合ひの者ども、諷らるるを聞いて、それを咎めぬのみならず、結句同心して、我もその御面目に当たることをばあひ諷りまらした。とかくその寄合ひの人数は皆それをよう知られたれども、デウスの御名代の悪行もとり扱うて雑談の題目と為いたが、悪いと存じながら致いたことは身が誤りぢや。

あるパードレ様の日常の行ないについて、私と付き合いのある連中がこれを諷るようなことを申すのを四度ばかり聞きました。にもかかわらず、私はそれを咎めなかったばかりでなく、かえってそれに同意するようなことを言いたて、あまつさえ、パードレ様の面目を失墜させるようなことを申しました。その寄り合いの連中は皆、パードレ様の諷られても仕様のない行ないを存じておまして、その悪行を取り上げ雑談中の話題としたのですが、いやしくも相手はデウスの御名代に当たるお方、悪いとは思いつつそうした雑談に加わったことは、わが誤りにございます。

*Quater verò cum illi cum quibus ego colloquebar de cuiusdam sacerdotis moribus & modo viuendi murmurarent; non solum illos non reprehendi; quinimo cum illis consentiens ego etiam murmurauì de rebus grauibis illius honorem tangentibus. verum est quod omnes qui aderant, illud sciebant, sed contrectare & murmurare & facere materiam conuersationis impertinentis modum viuendi & defectus eius qui est loco Dei & hoc ex aduertentia fuit meus defectus.*

Mais: ouvi aproximadamente por quatro vezes os meus companheiros criticarem o modo de viver de um reverendo padre. Apesar disso, não os repreendi, mas antes permiti e até disse umas quantas coisas que manchassem a honra dele. É verdade que eles conheciam o seu modo de viver, o qual era digno de repreensão, mas, reconheço também estar errado ao fazer dele um tópico da nossa conversa banal, e tal ser muito mau, dado o facto de ser o padre um digníssimo representante de Deus<sup>84</sup>.

*cousas* (*Vocabulario*, f.329v). A declaração vista no *Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm* compilado por frei Colhado explica melhor a significação da palavra em questão no presente contexto, a qual diz: «*Verbum iocosum. Vanas palabras. Zōtan* [雑談]» (p.139).

<sup>84</sup> Achei interessante e pertinente uma observação vista num guia turístico do Japão, o qual diz, explicando a importância da conversa banal entre os japoneses: «Na conversação em geral, evite conflitos e humilhar alguém. Para os japoneses, o objectivo de uma conversa não é trocar ideias, mas apenas criar um relacionamento» (*Guia American Express: Japão*, Porto, Livraria Civilização Editora, 2001, p.366). Por outro lado, no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* regista-se o vocábulo «*Guiron*» [議論], o qual, apesar de ser definido como tendo um valor neutral como «*Arasoi, ronzuru* [争い, 論ずる]. *Disputa*» (f.119v), não é tido necessariamente como aconselhável nem desejável pelos japoneses, mais especificamente, nas regiões onde se registou e ainda se regista uma forte influência de um conceito associado com a filosofia dos samurais, filosofia essa que não presta o devido respeito à eloquência, até desprezando a loquacidade dos homens. Relativamente ao acto deste confessado, pode-se explicar

QUINTA CONFISSÃO ACERCA DO QUARTO MANDAMENTO

Sono foca, suqima<sup>85</sup> mo nõte miga fũfu no uie ni rinqi<sup>86</sup> na cocoro uo uocoite, aite made tare to mo jasui<sup>87</sup> xite, ninin nagara nicui<sup>88</sup> atçu<sup>89</sup> to uomoi, naraba (\*), docu<sup>90</sup> de nari tomo uchi corosõ to zonji maraxita coto ga nido gozatta.

その外、透間も無うて身が夫婦の上に恪気な心を起こいて、相手まで誰とも邪推して、二人ながら憎い奴と思ひ、ならば、毒でなりともうち殺さうと存じまらしたことが二度ござった。

さらに、お互いに何の隔意もなく暮らしている私の妻に対し恪気を起こし、相手までたれそれと邪推致し、ふたりながら憎い奴と思ひ、できれば毒でも盛って殺そうと思うたことが二度ございました。

---

de uma forma engraçada através da significação metafórica da palavra «Xirivma» [尻馬]. Veja-se a sua definição no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*: «Causalgar nas âcas do caualo indo outro na sella. ¶ Item, per met. Fitono cotobano xirivmani noru [人の言葉の尻馬に乗る]. Repetir sem proposito o que [diz] o outro» (f.306). Apenas a título de chiste, esta expressão tem correspondência com o adágio luso: «Maria vai com as outras». Pode-se dizer que ele apenas «fitono cotobano xirivmani notta» – expressão utilizada ainda hoje – de maneira a evitar disputas desnecessárias com os que o rodeiam.

<sup>85</sup> Suqima [隙間・透き間]. Vide, Suqi [隙・透き] (*Vocabulario*, f.231v). Suqi [隙・透き]. l, suqima [隙間・透き間]. *Greta, ou fenda*. ¶ Item, per met. Tempo, ou vagar. Vt, Fimano suquiuo yezu [隙のすきを得ず]. Não ter tempo, ou espaço de fazer algũa cousa. ¶ Suquiuo nerõ [隙を狙ふ]. *Buscar conjunção de tempo* (*Vocabulario*, f.231v).

<sup>86</sup> Rinqi [恪気]. Voximu cocoro [恪しむ心]. *Ciumes que hum tem de outro ser amado, ou fauorecido*. ¶ Rinqi suru [恪気する]. *Ter ciumes* (*Vocabulario*, f.210).

<sup>87</sup> Iasui [邪推]. Yocoximani facaru [邪に量る]. *Iuizo temerario, ou mà sospeita* (*Vocabulario*, f.139v).

<sup>88</sup> Nicui [憎い・難い]. *Cousa odiosa, ou aborreciuel: junto este adjectiuo às raizes de muitos verbos faz ser a tal acção difficultosa*. Vt, Xinicui [し難い]. *Cousa difficultosa de se fazer, &c*. Nicũ [憎う・難う]. Nicusa [憎さ・難さ] (*Vocabulario*, f.182v).

<sup>89</sup> Se bem que a forma normal da presente palavra seja «Yatçu» [奴], a qual define-se no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* como «Aquelle, falando com algum desprezo» (*Vocabulario*, f.318v), todavia, a palavra «Atçu» não é um mero erro tipográfico, segundo diz Ôtsuka Mitsunobu, por se poderem confirmar outros exemplos em outras fontes, entre os quais ele cita apenas um a partir do *Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm* compilado por frei Colhado: «Abominabilis. Aborrecible. Nicui atçu [憎い奴]» (p.166. Cf. *Koryādo Sangeroku Shichū*, p.37, 75-76).

<sup>90</sup> Docu [毒]. *Peçonha*. ¶ Docuuo majiyuru [毒を交ゆる]. *Misturar peçonha*. ¶ Docuuo nuru [毒を塗る]. *Por peçonha, ou vntar algũa cousa com peçonha*. ¶ Docuuo atayuru [毒を与ゆる], l, Docuuo cõ [毒を飼ふ]. *Dar peçonha a comer*. ¶ Docuuo qesu [毒を消す]. *Apagar a peçonha com contra peçonha*. ¶ Docuuo tatçu [毒を断つ]. *Não comer comeres prejudiciais* (*Vocabulario*, f.72).

*Præter hoc: absque aliqua vel minima rationis rimula de vxore mea zelotipiam formans & de complice etiã iuditiũ temerariũ: contra vtrumque iratus decreui si possem illos vel veneno saltim interficere; hoc autem bis accidit.*

Mais, tive ciúmes da minha mulher<sup>91</sup> com quem tinha convivido até então sem fenda nenhuma. Imaginando que a minha esposa mantinha relações adúlteras com fulano de tal, abominei-os, pensando por duas vezes matá-los, se possível, através de veneno.

#### SEXTA CONFISSÃO ACERCA DO QUARTO MANDAMENTO

Mata nhôbõ codomo no iaxinai<sup>92</sup> nitçuite saicacu<sup>93</sup> cocorogaqe<sup>94</sup> mo xica xica

<sup>91</sup> «miga fūfu» (japonês) et «vxore mea» (latim) *in textu*. Actualmente a palavra «Fūfu» [夫婦] significa apenas “casal”, mas no tempo de frei Diego Colhado o vocábulo «Fūfu», com a quase mesma pronúncia que hoje, significava, de vez em quando, apenas uma parte do casal, cuja distinção não era tão difícil através do contexto em que se empregava o mesmo. Quanto à exemplificação do mesmo fenómeno linguístico que acontecia às palavras «Fusai» [夫妻] (cf. *Vocabulario*, f.111v) – que quer dizer actualmente apenas “casal” – e «Tçuma» [妻] (cf. *Vocabulario*, f.247) – que quer dizer actualmente apenas “esposa”, veja-se a anotação que Ôtsuka Mitsunobu faz na sua obra *Koryãdo Sangeroku Shichū*, Rinsen Shoten, 1985, p.75. Para confirmar o sobredito facto, cabe-me apresentar o primeiro artigo a ser interrogado pelo confessor acerca do sexto mandamento de Moisés («Dairocuno Madamento» [第六のまだめんと]) contido no livro intitulado *Salvator Mundi* ou *Confessionarium* publicado em 1598 e redigido inteiramente em caracteres japoneses – ideogramas chineses e letras fonéticas japonesas misturados –, cujo único exemplar encontra-se conservado na Biblioteca Casanatense, Roma:

1. Cõxocuno toganì cocoroyubeki coto ari. Soreto ippa, tagaini tçuma naki tokino toga, aruiua futarino vchi fitoriuva fūfuuo mochinagara vocaxexi togaca, mata aitenõ vonna virgem tote, imada vottono majiuarino michiuo xirazaru fitoca, mataua fubonno guan aru fito nite arixiyauo mõi vacatçubexi [かうしよくの科に心得べき事あり。其といつば、たがひにつまなき時の科、或は二人の内一人はふうふをしながらをかせし科か、又あひでの女びるぜんとして、未夫のまじはりの道をしらざる人か、又はふぼんのぐわんある人にてありしやを申分べし]。Tradução portuguesa: Relativamente aos pecados da luxúria há umas coisas em que vós – quer marido, quer esposa – tendes de cuidar. Quer dizer: deveis confessar, discernindo os pecados cometidos por ambos de vós quando ainda não tinheis vossos «Tçuma» – quer marido, quer esposa – daqueles cometidos quando um de vós já tinha o teu [a tua] «Fūfu» – marido ou esposa –; deveis – só homens – confessar ainda, de forma específica, não só os pecados cometidos para com as mulheres que ainda não conheciam o caminho das uniões conjugais – chamadas «Biruzen» (“virgens”) –, mas também aqueles cometidos para com as mulheres que tinham voto de castidade.

<sup>92</sup> Yaxinai [養ひ], Yaxinõ [養ふ], Yaxinõta [養うた]. *Criar, ou sustentar* (*Vocabulario*, f.318v). A palavra «Yaxinai» empregada aqui é a forma substantivada do verbo «Yaxinõ».

<sup>93</sup> Saicacu [才覚]. *Industria, prudencia, &c.* ¶ Saicacuuo megurasu [才覚を廻らす]. *Vsar de industria, & inuenção* (*Vocabulario*, f.215v).

<sup>94</sup> Cocorogaqe [心掛け]. *Cuidado, & diligencia* (*Vocabulario*, f.53v). Cf. Cocorogaqe [心掛け], Cocorogaquru [心掛くる], Cocorogaqeta [心掛けた]. *Ter cuidado, & diligencia* (*Vocabulario*, f.53v).

gozaraide, sono xindai<sup>95</sup>, guiõgui, Christian no ioi catagui<sup>96</sup> nando made camavaide va no coto naredomo, ima made zuibun itaxi maraxeide miga toga de gozaru.

また、女房・子供の養やしなひについて、才覚さいかく・心掛こころがけもしかしかござらいで、その進退しんたい・行儀ぎやうぎ・キリシタンのよい形儀かたぎなんどまで構かまはいではのことなれども、今いままで随分ずいぶん致いたしまらせいで、身みが科とがでござる。

また、女房・子供の養育について、しかるべき才覚も心掛けもありませんでしたし、彼らに日頃の行ないや生き方を正させたりキリシタンとしての良風を守らせたりするべきでありましたのに、今までそういう努力をあまり致してきませんでした。これは私の科にございます。

*Peccauì etiam quia vsque modo non adhibui diligentiam neque habui curam circa sustentationem familie, vxoris, & filiorum, neque multum fui sollicitus de eorum bona educatione & modo viuendi Christiano etiam si sit res tam necessaria, & quæ tam stricte & accurate debet tractari.*

Mais: não tive cuidado algum nem sequer fui diligente relativamente à criação e sustentação não só da minha esposa como também dos meus filhos. Devia ter-me esforçado por obrigá-los a melhorar a sua conduta e o seu modo de vida, obedecendo aos bons costumes cristãos, mas não tenho agido dessa forma, sendo esse o meu pecado.

---

<sup>95</sup> Xindai [進退]. *Obras, ou vida que hum faz boa, ou ma.* ¶ *Item, Estado de qualquer pessoa, ou dominio.* ¶ *Cono fitou miga xindai suru* [この人を身が進退する]. *Este homem està a meu mandar, ou faço delle o que quero.* ¶ *Cuniuo xindai suru* [国を進退する]. *Possuir todo o reino, & governalo á vontade* (*Vocabulario*, f.302v).

<sup>96</sup> Catagui [形儀]. *Costume* (*Vocabulario*, f.42).